

コンサルテーション事業報告

事業名 重複障害児・者コミュニケーション支援

事業代表者 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

対 象 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

目 的 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲のあり方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

主なスタッフ 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：笹原未来・野崎義和・新谷千尋

東北大学教育学部：阿部友幸・佐藤晴佳・佐藤真理

実施内容

(1) 教育相談として対応している事例 (5 事例)

5 事例は、弱視ろう (盲学校高等部)、肢体不自由 (障害者通所施設、小学部)、あるいは重度知的障害 (障害者通所施設、養護学校高等部) を有している。各々月に 1 度位の割合で保護者と共に来談しており、研究室やプレイルーム等で対応している。全員がコミュニケーションの発信・受信手段やコミュニケーション内容の拡がり为目标であるが、その他に、楽器や玩具の操作行動、絵画の表現行動の広がりも大きな課題である。

本年度は、この内の 1 事例の経過について、日本特殊教育学会第 47 回大会にて発表した (笹原・川住, 2009)。

(2) 仙台市発達相談支援センターとの連携で対応している事例 (1 事例)

仙台市発達相談支援センターでは、重症心身障害児・者へのコミュニケーション支援事業を行っている。本研究室では、この事業と連携・協力することを通して、在宅重症心身障害児・者へのコミュニケーション支援を図りたいと考えている。本年度は、本事例に関する実践研究が「特殊教育学研究」誌に掲載予定である (笹原・川住, 2010)。

(3) 病院・施設に長期入院中の事例 (2 事例)

われわれはこれまで、国立病院重症心身障害児病棟に入院していて、発信手段に大きな

制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人5名に対し、当事者間相互のコミュニケーション支援を1~2ヶ月に1度の割合で実施してきた。本年度はこのうちの1名について、パソコン操作による文字でのコミュニケーション支援（文字習得・単語構成・短文作成・話題伝達の促進）を昨年度に引き続き継続して実施した。また、保護者と看護スタッフの要望を踏まえ、ウェルドニッヒ・ホフマン病児へのコミュニケーション支援（コミュニケーション意欲の促進・支援機器操作・文字習得の課題学習の導入）を行ってきた（佐藤晴佳，2010）。さらに重症心身障害児施設に長期入所中の子どもや成人を対象に、語りかけ場面におけるコミュニケーション行動に着目した取り組みを昨年度から継続し、これまでの経過をまとめた（新谷・川住，2009；新谷，2010）。

(4) 学会報告等

- 笹原未来・川住隆一（2009）Rett 症候群者の探索行動の促進に関する実践研究—ブロックへの接近・操作行動に視点を当てて—。日本特殊教育学会第47回大会発表論文集，217。
- 笹原未来・川住隆一（2010）医療的ケア場面における重度・重複障害者の状況把握の促進課程。特殊教育学研究，47(3)。（印刷中）
- 佐藤晴佳（2010）ウェルドニッヒ・ホフマン病児における課題学習の導入に関する研究。平成21年度東北大学教育学部卒業論文。
- 新谷千尋・川住隆一（2009）視覚障害を伴う重症心身障害者の語りかけ場面における傾聴について。日本特殊教育学会第47回大会発表論文集，216。
- 新谷千尋（2010）語りかけ場面における視覚障害を伴う重症心身障害児・者の聴性行動の促進に関する研究。平成21年度東北大学大学院教育学研究科修士論文。